トオリマチ奇譚

ゲームブック制作プロジェクト MAP
（武田彩莉、谷口茉優、並川詩織、安村卓士）

この物語はフィクションです。

こんにちは、MAP(Mobile Alternasu Project)です。私たちは「語らいながらまちを歩く」ことを軸に活動しています。私たちが歩く中で見聞きした言葉、音、景色とそこで生まれた感覚をどのようにすれば分類せず紡ぐことができるのか。この問いをきっかけに、アーカイブ方法を模索し、ゲームブック制作プロジェクトが始まりました。

アーカイブとは、資料の収集、分類整理、保存といった一連の活動です。例えば、あなたがまちを歩いている時に「落ち葉」を拾ったとします。このとき「落ち葉」は「植物」に分類され、「ある植物の落ち葉」として記録に残ります。しかし、見つけたとき「落ち葉」には見えず「これはなんだろうな」と想像を広げてみる。私たちは、この「なんだろう」と想像したことを記録していきました。

そして本書では、フィクションを織り混ぜ、「現実のものから飛躍した空想までもそのままに。」を目指し、アーカイブを試みています。

色々述べましたが、ここからは、ただゲームブックとして楽しみ、フィクションとノンフィクションの間を渡り歩いてもらえたら幸いです。

改めて、本書は秋田県秋田市にある「通町商店街」をリサーチした内容をもとに作られた物語です。くつろぎながら一人でやってもよし、実際に街を歩いてみてもいいでしょう。遊び方は、「文中に出てくる選択肢を選び、番号に沿って進む」だけ。ストーリーの結末はあなたの選択次第です。慎重に、ときに大胆に。それでは、いってらっしゃい！

ゲームブック制作プロジェクトMAP
（武田彩莉、谷口茉優、並川詩織、安村卓士）

【1】

あなたは、お盆休みを利用して秋田に来ていた。特に地元というわけではないけれど、この長閑な自然と程よい喧騒が心地よく、あなたは長期休暇のたびに秋田によることにしている。

今回の旅行では、秋田市の中心部に宿をとり観光をすることにした。宿は市の中心部にある幹線道路に面しているが、建物の周りは少し暗くあたりは低木で覆われている。このじめじめとした気温も木陰では幾分かマシな気がする。いつもは観光客向けの旅館ではなく、ビジネスホテルに泊まりその分美味しい食べ物をいっぱい食べたりしているが、今回は趣向を変えて少し高めの旅館を予約してみた。

旅館に着くと、従業員が一堂に集まり私の到着を出迎えてくれた。仕事のことは忘れて、ゆっくり羽を伸ばそう。あなたは、夕飯の前に少し宿を散策することにした。

旅館の中はとても静かで、自分だけしか泊まっていないのではないかと錯覚してしまう。ふと見渡すとエントランスから中庭がきれいに見えることに気づいた。あそこでもう少し時間を潰そう。自分一人だけかと思ったが先客がいたらしい。椅子に座り窓の外を眺めている。気の良さそうな初老の男性だ。私は少し離れた椅子に腰をおろし同じく窓の外を見遣った。

男性に話しかける【2にすすむ】

男性に話しかけない【3にすすむ】

【2】

　その初老の男性は通りがかった旅館の女将と気さくに話している様子からして、地元の住民だろうか。明日の予定も決まっていないので、男性にこの通町について聞いてみることにした。

「あの、すみません。この辺にお住まいなんですか。」

「ああ、まあそうだね。ここにはよく世話になってる。」

「明日この辺を巡ってみようと思うんですが、どこかおすすめのところはありますか？」

そう尋ねると男性は暫く「う～ん」と考えた後、おもむろに口を開いた。

「すぐそこに商店街があってね。人通りはそんなに多くないけど、大火を免れた古い建物が残っていたり、この街を盛り上げようと時々市場が開かれたりもしてる。もし歴史とか古いものに興味があるなら、所々立てられている看板や碑からこの辺りの歴史を知ることができるよ。」

　なるほど、その商店街を回ってみるのは良さそうだ。面白いお店にも出会えるかもしれない。

「その商店街手前のT字路にも、立て看板があったな。確か石敢當がある。」

「いしがんとう……」

耳馴染みがないが、どうせ暇だし見に行ってもいいかもしれない。

「教えていただいてありがとうございます。明日見に行ってみますね。」

あなたは、そうお礼を告げて椅子から立ち上がり、自室で時間を潰すことにした。

　旅館の夕飯はやはり美味しい。秋田の山の幸と海の幸、両方楽しめるなんて。今日はすっかり疲れてしまった。部屋にはすでに布団が敷かれている。もう休もう、そして明日は商店街へ散歩に出かけてみよう。

【6にすすむ】

【3】

椅子に腰掛け、窓の外を見遣ると日頃の疲れも相まって睡魔が襲ってきた。夕飯までここで仮眠をとるとしよう。

旅館の夕飯はやはり美味しい。秋田の山の幸と海の幸両方楽しめるなんて。今日は長旅ですっかり疲れてしまった。部屋にはすでに布団が敷かれている。もう休もう、そして明日はこの旅館の周辺を歩いてみよう。

【17にすすむ】

【4】

店主の好意に感謝しつつ、大丈夫ですと断って店内を一望する。陳列しているお菓子はたくさんの種類があり、個性豊かだ。奥には製造所らしきものが見えるが、これだけのお菓子を店主が一人で作っているのだろうか。小腹が空いていたのでやっぱり試食を下さいとも言えず、ショーケースの中のプリンを指して「一つ下さい」と言おうとした時、顔を青ざめる。橋を超えてから、そういえばポケットがとても軽いことに気がついた。財布とスマートフォンがない。肩を落としたあなたは諦めて店を出ることにした。

「またどうぞ」

優しい店主の声を背にあなたは店を後にした。

【5にすすむ】

【5】

外に出ると何やらパンの匂いが漂ってくる。お金を持っていないので冷やかしになってしまうかもしれないが…何か情報収集できないかと思い、その匂いの元に向かう。

【15にすすむ】

石敢當

【6】

昨日の男性の話もあり今日は例の商店街を散策してみることにした。外に出て橋を渡ろうとしたところ、確かに近くに立て看板があった。その立て看板付近の地面には膝の丈程度の白い石が一つ立てられている、これが昨日話に聞いた『いしがんとう』だろうか。確かに『石敢當』の文字が彫られているのが見える。看板の文を見るに、どうやらこれは魔除けの意味があるらしい。

【11にすすむ】

【7】

暫くして、店主に話しかける。

「この辺りのことを調べているのですが、何かご存知ないですか?その、この辺りで最近あったこととか。」

自分でもざっくばらんな質問をしてしまったと焦ったが、店主は「最近あったこと……」と呟く。

「大したことじゃないかもしれないけど、そういえば最近妙に煙くさい感じがしてて。どこかで野焼きでもしているのかしらねえ。でもこんな街中じゃあと思って不思議で。でも火事とか、どこも起きてないの。」

確かに、橋を渡った時はわからなかったがほんのわずかに煙たいような気がする。「なるほど。それは妙ですね。」そう告げて店を後にする。店を出た先に何やら鳥居が見える。神社のようだ。次は神社に向かおう。

【21にすすむ】

【8】

様々な表情を持った陶器を眺めながら、口のなかに広がる奥深い苦味を味わう。

「お茶碗、湯呑み、お皿など陶器はどれも使い捨てのものより値段はかかるけど、小さな贅沢を楽しんでホッと一息ついてほしいな」と店主は語った。少し気分が落ち着いた。

【19にすすむ】

【9】

昨日洗濯してしまった飴の包み紙を手でもてあそびながら、あなたは店を後にする。

【35にすすむ】

【10】

商店街を少し歩くと、あなたは美味しそうな香りがしていることに気が付く。反対側の歩道からしているようだ。もしかしたら匂いの先に人がいるかもしれない。

匂いの先へ行く【15にすすむ】

まっすぐそのまま進む【16にすすむ】

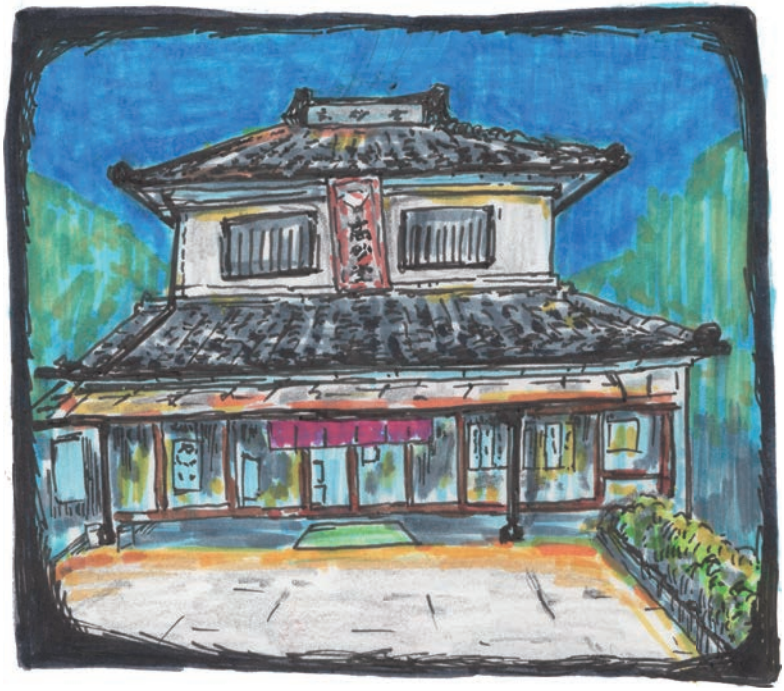
【11】

橋を渡る。数歩歩いたところで、何か生物が腐敗したような匂いが微かに蒸し暑さと共に立ち込めてきた。不快感を覚え、反射的に橋を戻ろうと来た道を振り返るとまだ距離にして数メートルしか渡ってきていないはずの橋が遥か彼方まで続いているように見えた。手放しそうになる気を必死に手探り寄せながら辺りを見渡す。遠くに見える橋の柵干から銅像がこちらを悲しげな顔で伺っているように見えた。どうやら先に進むしかないようだ。戸惑いと恐怖を残しつつも、橋を渡り切ると長く広い道の両脇に様々な店が立ち並んでいた。「通町商店街」と書かれた看板が目に入る。背後の禍々しい雰囲気とは打って変わり、人通りこそないものの店々からは人の気配を感じる。

あなたは、商店街に入ろうとしている。

向かって右側の歩道を歩く【12にすすむ】

向かって左側の歩道を歩く【10にすすむ】



【１２】

商店街を少し歩くと、あなたは古い木造の立派な建物を見つけた。外に出ているのぼりなどからここはお菓子屋さんであることがわかる。店内は明治時代を思わせる造りで、天井一面には鮮やかなターコイズブルーの装飾が施されている。どうやら和菓子屋のようだがガラスケースの中にはタルトやプリンなどの洋菓子もあり、どれも美味しそうで目移りしてしまう。バラエティ豊かなお菓子の数々に目を奪われながら暫く店内を彷徨っていると、大きな温度計のようなものが目に入る。これはどのようにみるのだろう。首を傾げていると背後から声がした。

「それは時計ですよ。明治時代の。えーと今１１時３２分ですね。」

驚いて振り返ると目元の優しげなご老人が立っていた。身なりを見るに、ここの店主のようだ。人がいるということに安堵したあなたは、ここはどこなのか、現実離れした先程の光景は一体何なのか、どうして旅館に戻れないのか……、たくさんの質問が喉からでかかった時、図ったようにお腹がぐう……と鳴った。

「試食、食べますか？」

食べる【１４にすすむ】

食べない【４にすすむ】

【１３】

貰えるものは貰っておきたい。小腹が空いた時の食糧にしよう。そう思いありがたく袋入りのパンの耳をもらう。

【７にすすむ】

【14】

　こちらの返事を待たずして店主はショーケースの方に行き、パックを一つ取り出して戻ってきた。そして柔らかな白い薄紙に包まれたお菓子を手のひらに載せてくれる。

「うちの名物です。」

それを開くと珊瑚色をしたまろい四角のお餅だった。薄くまぶされている粉が零れないように口にそっと含むと、溶けるような口当たりで優しい甘みとりんごの香りが広がる。美味しい。ほっとする懐かしい味に、思わず笑みが溢れる。それを見た店主が目元の皺を深めた。

「果樹園を営んでいた初代が作っていたりんご羊羹から、形を変えて引き継がれてきたものなんです。素材にこだわりながら、うちは機械に頼らず、ほぼ手作りで作っているんですよ。」

　もう一つ頂いたので、まじまじと見つめる。確かに、形が不揃いのような。

「うちのお菓子はサイズなど多少の誤差があれど、機械では測れない味のバランスなどは培ってきた勘を頼りに作っているんです。時代に合わせて味を変えたりもしています。」

　少しだけ不揃いなお菓子の温かみと、店主の職人技に感動し、味わってお菓子を食べる。お土産にも欲しい…そう思ったあなたは6個入り下さい、と店主に伝え財布を取り出そうとしたが、顔が青ざめる。橋を越えてから、そういえばポケットがとても軽いことに気がついた。財布とスマートフォンがない。その様子を見た店主は、6個入りを袋に入れて手渡してくれる。

「またきてください。」

　店主の好意に心を打たれながら、ありがたく受け取り、店を後にした。無事に元の世界に戻ったら、あのお店に行こう。そう決意した。

【5にすすむ】

名産
りんご
もち

【15】

匂いを辿り、大通りを超え、小道に進んでみる。暫く歩くと象のイラストが描かれた看板と店を発見した。店内に入ってみると、「いらっしゃいませ」の声と共に小麦の香りがいっぱいに広がる。そこには様々な種類のパンが並んでいた。匂いの元はこの店だったらしい。

自分以外にもう一人先客がいた。店主らしき初老の女性と客の会話に少し耳を傾ける。

「――さん、今日たくさんあるから持っていって。」

「いいの？これうちの犬も大好きなの。」

犬…？犬はパンを食べてもよかっただろうか。

常連客は世間話もそこそこに、店を後にする。

「あの…すみません。さっきのお話聞こえちゃったんですけど、犬も食べられるパンをわざわざ作っているんですか？」

すると店主は一瞬キョトンとして、「ああ」と吹き出した。

「うちのパンは無添加で作っているの。味付けがしてあるものは食べさせちゃダメだけれど、食パンの耳なんかはワンちゃんが食べても大丈夫なくらい体に優しいの。」

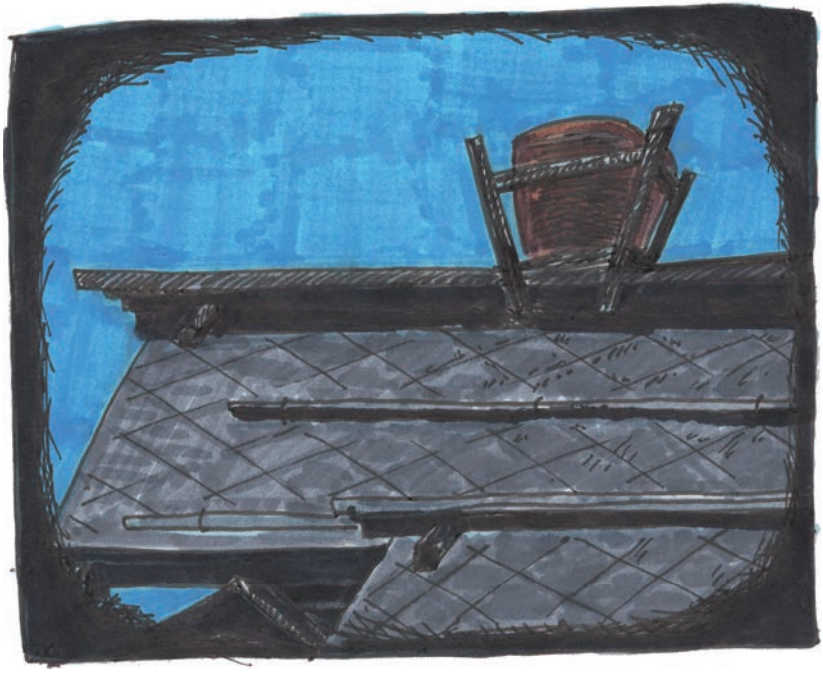
「へえ。それはすごいですね。」

しばしパンを眺めて感心していると店主が声をかけてくる。

「あなたも犬を飼っているの？よかったら廃棄間近のパンの耳があるんだけど、いる？」

もらう【13にすすむ】

遠慮しておく【18にすすむ】



【１６】
今日は日差しがとても強い。ふと上を見上げると古い建物の屋根上に大きな壺のようなものが見える。何かはわからないが雨水でもためているのだろうか。
【３２にすすむ】

【１７】
今日は少し散歩をしよう。外に出て橋を渡ろうとしたところ、近くに石碑があった。よく注視すると何か文字が彫られているようだが、よく読めない。
【１１にすすむ】

【１８】
なんとなく気が引けて、遠慮することにした。
【７にすすむ】

【１９】
店を出てから少し歩くと大きなスーパーを見つける。ちょうどお店を出たご婦人がこちらに話しかけてきた。少し腰の曲がったご婦人はこの通りの近くに長年住んでいる人らしい。
商店街について聞いてみると、この大通りを通り過ぎた先にある駄菓子屋の噂を教えてくれた。一見普通の駄菓子屋だが、何でも店主が不思議な力を持っており、「音」にまつわる活動をしているらしい。噂の内容があまり理解できずに、話を切り上げその場を後にした。
暫くして、少しピリッとした空気を感じ違和感を覚える。
【２９にすすむ】

【２０】

今は珈琲の気分ではなかったので、そっと丁寧にお断りしてお礼を言ってからお店を後にした。今度は目の前に経っている薬屋に行ってみようと思う。

【３６にすすむ】

【２１】

視界に入った鳥居を目指し、神社に辿り着いた。こんな不思議な目に遭っているのだから、夢なら早く醒めて欲しい。そう思いながら拝殿の前に立ち、神にも縋る思いで必死に両手を擦り合わせる。

「ペケ…ペコ…ペコッ…ペケ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜！！！！！！！！」

神社の方から鈴の音のような、しかし奇怪な音が聞こえる。

「ペケッ」「ペコッ」

好奇心に耐えきれず振り返る。そこには、何だろうか雲のようにふわふわと浮遊する狐のような出立の何かが浮いていた。こちらが歩き出すと、向こうも後を追ってついてくる。コミュニケーションは取れそうにないが悪いものではなさそうだ。放っておくか。橋の上での体験といい、この狐といい何だか奇妙なことがよく起こる。やっぱりここは普通の世界ではないのか……？？受け入れ難い状況に狼狽つつも歩を進めるしかないようだ。

向かいのお店へ行く【３２にすすむ】

薬局へ行く【２５にすすむ】

【２２】
　自転車に跨がり、全力でペダルを漕ぐ。橋まで一直線なのでハンドルを振らずまっすぐ進むだけだ。すると背後で化物が咆哮をあげズシンズシンと立ち上がる音が聞こえた。振り返ることなく一心不乱に橋へ向かう。化物が大地を踏み締める度地面が僅かに隆起し時々転びそうになる。化物のスピードは上がっていき、徐々に距離っを詰められる。
　【４８にすすむ】

【２３】
　ふと背後を見ると狐の神様…ペケペコは愉快に笑っている。こっちは死にかけているというのに、神様は数々の不思議な体験を共にできて嬉しいようだ。すると拝殿の扉が開き、眩い光を放つ。どうやらここから逃してくれるらしい。
　ここから逃げる【END １にすすむ】
　それでも橋へ向かう【４８にすすむ】

【２４】
　何か食べ物で気を逸らしているうちに逃げることはできないだろうか。そう思いポケットを漁ると
　パンを持っている場合【４４にすすむ】
　持っていない【３３にすすむ】

【２５】

先に進んでいくと、間口がとても広い薬局が目についた。店舗に入ると創業が古いのか、店やこの地域の歴史を紹介するパネルなどが壁面に展示されていた。何となくそのうちの一つをみると古い時代の火事を伝えるような絵があった。キャプションには「俵屋火事」と書かれている。近くの店員に詳しく話を聞くと次のことがわかった。

・俵屋火事とは、明治十九年にここら外町で起こった大火であったこと。
・辺り一体の建物３０００件以上が焼失した。
・この薬局の建物も当時の火の手に飲み込まれ焼失した。

【２６にすすむ】

【２６】

道を歩いていると、反射した光が目をかすめる。ふと見るとパステルカラーの看板をしたクリーニング屋の壁面に円形の鏡があることに気がつく。

こんなところに鏡があるなんて、何のためだろう。暫く見つめていると吸い込まれそうな心地がした。僅かに疑問に思いながらもその前を通り過ぎる。

【２８にすすむ】

【27】

なぜか自転車が買える分だけのお金が入っている。驚愕してふと振り返ると悪戯な笑みを浮かべた狐の神様……鳴き声から「ペケペコ」と名付けた狐と目があった。神様も気まぐれなものだ。自転車を購入し大通りに出る。

【35にすすむ】

【28】

不思議な鏡を通り過ぎると、一軒の花屋が目にとまる。黒板風の手書きの看板には「おむつケーキ」と書いてあり、気になったあなたはお店の中へ足を運ぶ。ひんやりと、しっとりとした空気に包まれ、目の前には色とりどりの花が飛び込んでくる。その中におむつケーキを見つけ、じっと眺めていると店主が声をかけてきた。

「それ、出産祝いの贈り物に最近人気なんですよ。赤ちゃん用のおむつでできているんです。」

それから店主は石鹸でできた枯れない花、シャボンフラワーも人気ですよと教えてくれ、可愛らしいそれらに目移りしているとクイズを出してきた。

「このお店に一般的な花屋と違ってないものがあります、何だと思いますか?」

ショーケースを見る【30にすすむ】
店の奥を眺める【31にすすむ】

他

【２９】

あなたは大きな自転車屋の前に辿り着いた。開放感のあるいウィンドウからはお店の床だけでなく天吊りでも所狭しと自転車が並べられているのが見え、今時個人営業でこの大きさは珍しい、と思ったあなたはしげしげとお店を外から眺める。すると中から出てきた店主に声をかけられた。なんでも、この自転車屋は秋田市で最も長い歴史があり、昭和三年から続いているそうだ。店主は三代目らしい。当時はバイクなども売っていたが今は自転車専門になっているとのこと。お店には店頭に３５０台、倉庫にも同じ数ほどストックがあることから７００台近い自転車を販売しているという。すると、１台の自転車に目が留まり、あなたはその自転車に惹かれるも、その値段をみて落胆する。わたしは今、一銭も持っていないのだった……。あなたはそんなことを考えながらふとズボンのポケットに手を入れる。

狐の神様を連れている【２７にすすむ】

いない【９にすすむ】

【３０】

店内を一通り見回した後、冷蔵のショーケースが無いことに気づいたあなたは、そのことについてすぐさま答えた。

「正解です。うちの花は冷蔵のケースに入れないことによって外との温度差の影響を受けにくいお花に育つんです。だから長持ちしやすくて、お得意先の花道の教室からも評判がいいんですよ。」と店主は嬉しそうに言う。店の前方に貼られている写真には、店主が所属する野球クラブの写真や街のお祭りの記事などが貼られており、話が弾んでいると気を良くした店主から帰り際に小さなブーケを貰った。お礼を言い店を後にした。

【３７にすすむ】

【３１】

ピンと思い浮かばなかったあなたは小首を傾げた。すると、

「うちは冷蔵のショーケースに花を入れてないんです。外との温度差が抑えられて花が長持ちするんです。」

と店主は言う。なるほど、と思ったあなたは暫く店内を見て回った後、軽く会釈をして店を後にした店を後にした。次はどこへ行こう。

大通りをまっすぐ進む【３５にすすむ】

果物屋に進む【３７にすすむ】

【３２】

あなたは一軒の店の前にやってきた。二階建ての建物は、町屋を連想させる出で立ちをしており、ウィンドウからはたくさんの陶器や雑貨が見える。入り口には扉と同じくらいの大きさの福禄寿の信楽焼が置いてあり、恐る恐る入ってみると、ほのかにコーヒーの香ばしい香りがする。店内を一望していると気さくな店主が奥からやってきた。店主に昔の話を聞くと、このお店は大正四年創業で店主の曽祖父から続いており、店主は五代目。丸谷焼販売から始まったこのお店は、太平洋戦争のころは岐阜県から呼んだ職人から得た技を持って自らも器を作り、陸軍にも売っていたそうだ。今は陶器に加えて雑貨や珈琲豆を販売したり、店の外でお土産の自動販売機を設置したりして時代に合わせた新しい取り組みを行っているようだ。長い歴史に想いをはせていると、珈琲の良い香りがしてきた。店主が試飲として淹れてくれたようだ。

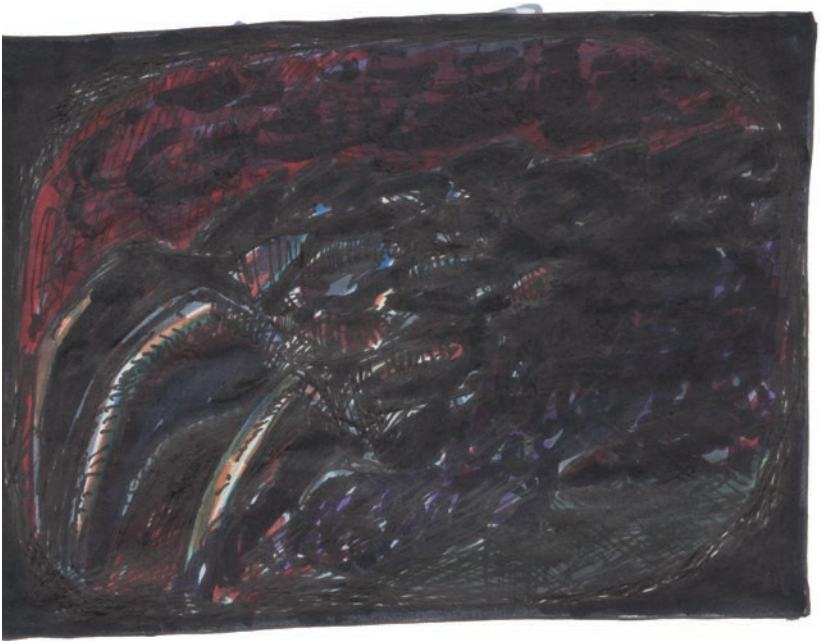
飲む【８にすすむ】

飲まない【２０にすすむ】

【３３】
ポケットを必死に漁っていると目の前の化物が咆哮をあげる。驚き後退り走ろうとしたが足がもつれ転げてしまう。
【４６にすすむ】

【３４】
後ろから化け物が迫ってきている。すると赤い鳥居が目に入り、神にすがる思いでそちらに飛び込む。
狐の神様を連れている【２３にすすむ】
連れていない【４５にすすむ】

【３５】
足を前に進める度に身体が重くなり、嫌な気配と煙の匂いが濃くなってくる。吐き気を抑えながら何とか交差点まで辿り着く。視界を霞ませるほどの煙が漂う中、大きな黒い影と対面する。その姿は二階建ての建物ほどあろうか。獣が四つ足を折りたたむようにして眠っているようにも見える。しかしそれは体表が常に蠢き判断に苦しむ。獣の四肢の先からは鋭い爪がチラつき、ゴツゴツした体表は黒く焼け焦げたように隆起している。
駄菓子屋の噂を知っている場合は【３８にすすむ】
急いで引き返し橋に向かって走る場合は【３６にすすむ】



【３６】
あなたは音を立てないように少し後退したあと、全速力で橋に向かって逃げる。
自転車を持っている場合は【４０にすすむ】
持っていない場合は【３９にすすむ】

【３７】
あなたは、果物屋さんを発見する。外から眺めていると、店内から優しそうなご老人が声をかけてきた。「どうぞ中に入ってみてください。今はみしょうかんがおすすめですよ。」
少しひんやりとしている店内には新鮮な果物が並んでいた。勧められるがまま、店内を物色する。色とりどりの美味しそうな果物が並ぶ中、一枚の写真に目がとまる。どうやら店主ご夫婦の写真らしい。写真の話を聞いてみると、このお店の成り立ちについて教えてくれた。
「元々は、私の母が魚屋と果物屋を始めて、それを兄弟で分けたんです。兄がやっている魚屋の方は今はスーパーになっているんですが。ほら、あそこですよ、道路の向かい側に、ここと同じ名前のスーパーがあるでしょ。」
確か、大通りを挟んだ向かい側に大きいスーパーがあったな。あれのことだろう。その時電話の子機が鳴り響き、店主がオーダーを書き留めている。忙しそうなので店を後にしようとすると、子機を肩と耳で挟んだままの店主からりんごジュースを貰った。
スーパーに行く【１９にすすむ】
行かない【３５にすすむ】

関谷くだもの店

【38】

化物を起こさないように傍をゆっくりとすり抜け、その先にあるはずの駄菓子屋に進む。あんなものに襲われたら無事では済まないことはわかりきっている。暫く慎重に進んでいるとぼんやりと光るソフトクリーム看板が目に入り、とにかく誰かに会いたい一心でその店に向かう。店内を伺うと例の駄菓子屋で間違いないようだった。入ると懐かしい駄菓子の数々が目に入り、少し安心する。昔は遠足でこれ買ったなあ…こんな値上がりしたのか、などしばし思いを巡らせていると奥の方はカウンターと厨房があり、食事ができる場所になっていた。メニューを見るに、対して普通の軽食屋と変わりないようだが……駄菓子屋で食事ができるなんて不思議なお店だな、と思っていると奥から店員らしき女性が気さくに話しかけてくる。

「いらっしゃいませ～」

「こ、こんにちは」

「今この時間はうどんとカレーしかないけど……あ、お弁当かソフトクリームもあるけどどう？」

明るい女性のもてなしにひとまず安堵する。

「あの、ちょっとお聞きしたいことがあって。最近この辺で異変とかありませんでしたか？」

「え？いや、特にはないけど…何かあったの？」

本当に心当たりがなさそうだ。この女性には……いや、この街の人はあの化物が見えていないのだろうか？

「あの、なんか、変な……変な化物がいて、」

「落ち着いて。あ、そうだ。いいおまじないを教えてあげる。まずね、右耳の内側に意識を集中させるの。」

そう言って女性は目を閉じる。同じように目を閉じ右耳に意識を傾けてみる。すると心に僅かな静寂がもたらされた。

「”すそいおん“覚えておいて。これはあなたもその周りの人も助けるから――――」

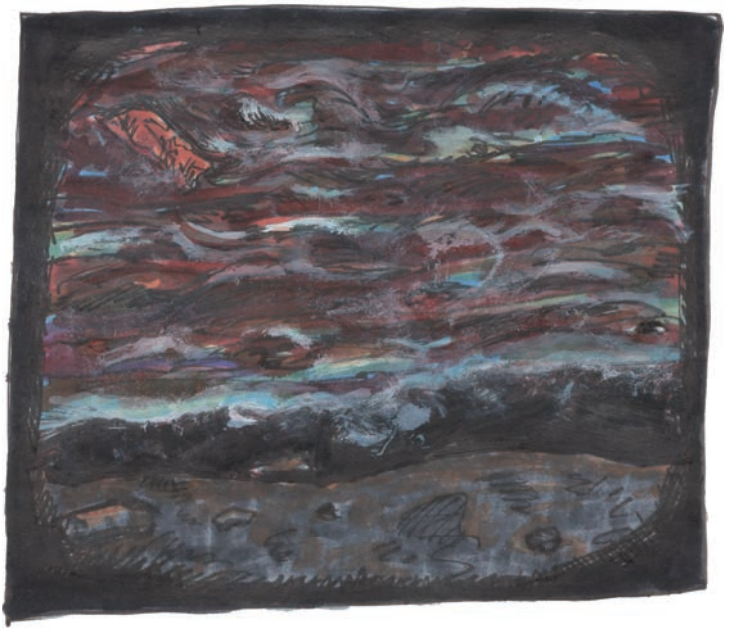
目を開けると駄菓子屋ではなく、先ほどの大通りに立っていた。目の前にはあの化物がいる。少したじろぐが僅かに立ち向かう勇気が湧いてきた。しかしどうしたものか、化け物が徐々に体を波打たせている。

どうやら起きてしまうのも時間の問題のようだ。心を落ち着けるため“すそいおん”と呟くとスッと頭が冴え始める。そうだ。化物が犬みたいな形をしているので
エサをあげたらいいのではないかと思う【２４にすすむ】
橋を渡る前にあった石碑が関係していると思う【４２にすすむ】
化物が起きる前に全速力で橋まで逃げよう【３６にすすむ】

【３９】
走り出したところで小石を踏みつけてしまい、ぺちんと転げてしまう。するとその音で化け物は目を覚ましズシン…ズシンと四つ足で立ち上がる。身体は燃えており、周囲の温度が徐々に上昇するのを肌で感じる。急いで立ち上がり痛む膝を叱咤しながら走り出す。しかし長くは持ちそうもなく、どこかに逃げ込むことにした。
クリーニング屋に行く【４１にすすむ】
薬局に行く【４３にすすむ】
やっぱり頑張って走る【４６にすすむ】

【４０】
自転車に跨がり、全力でペダルを漕ぐ。橋まで一直線なのでハンドルを振らずまっすぐ進むだけだ。すると背後で化物が咆哮をあげ、ズシンズシンと立ち上がる音が聞こえた。振り返ることなく一心不乱に橋へ向かう。化物が大地を踏み締める度地面が僅かに隆起し時々転びそうになる。
橋までたどり着くがなぜか崖のようになっており、覗くと川が流れている。流れも早く、それ以上進むことができない。振り返ると猛スピードで徐々に距離を詰めてくる化物と目があった。もう、終わりだ…そう思って反射的に身を屈めるとその頭上を化物が通り抜け、哀れな鳴き声をあげながら崖に落ちていく。暫くしてぼちゃん…と音がすると目の前に橋が現れた。助かったのか……？いまだ鳴り止まない鼓動を落ち着けつつ慎重に橋を進む。

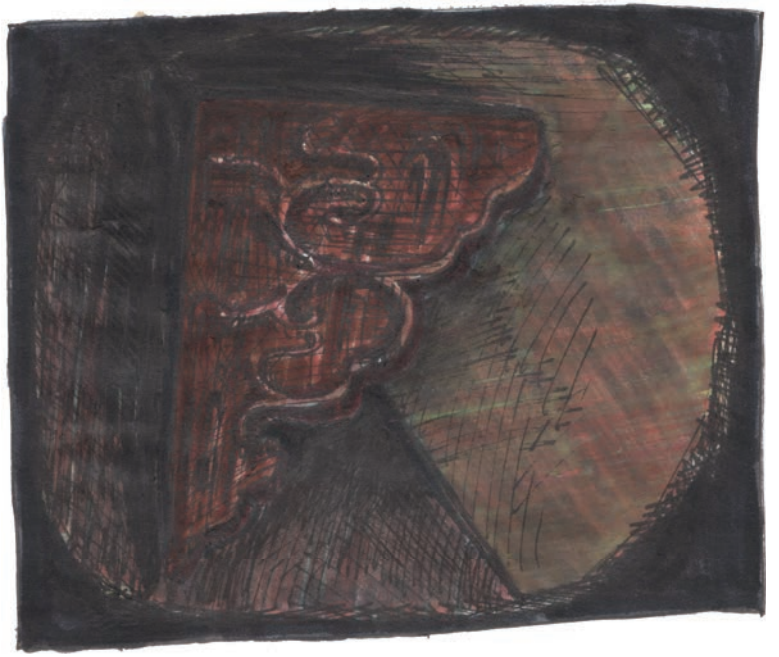
【END1にすすむ】



【４１】
クリーニング屋の前まで来ると、大きな鏡が目に入る。何やら吸い込まれそうな心地がして咄嗟に手を伸ばすと指先からグッと引っ張られるような心地がする。次の瞬間足まで浮き上がり、鏡に吸い込まれてしまう。
【ＥＮＤ１にすすむ】

【４２】
確か橋を渡る前に見つけた石碑、あれには魔除けの効果があるのではなかったか。思い出したあなたはそこまで逃げることにした。
自転車を持っている場合【４０にすすむ】
持っていない場合【３４にすすむ】

【４３】
薬局までなんとか走り、中へと滑り込んだ。店員はおらず、しんと静まり返っている。自動ドア越しに外を見ると、化け物は中に入ってこれない様子だった。化け物は悔しそうにひさし付近にある飾りに向かって唸っている。あれは……モチオクリ？雲と水の装飾が施してある。火除けのまじないの効果があるようだ。もしかして化物も火の禍いと関係しているのだろうか……偶然だったが助けられた。店内を周り消毒液と絆創膏を見つけると足の傷を癒す。気は引けたが非常事態なので許してほしい。一息ついたあと化物がよそ見をしているうちに裏口から外へ出て、また走り出した。
まっすぐ橋の方へ向かう【４６にすすむ】
神社へ駆け込む【３４にすすむ】
右手に逸れる【４７にすすむ】



【44】
そうだ、犬も食べられるパン…これなら化物の気を引けるのではないだろうか。そう思いパンを化け物の前に置き、距離を取るとスンスンと嗅いだあと一口で食べ切ってしまった。そして満足したのか化け物の歩みが僅かに遅くなる。今の間にもっと距離を取ろう。【34にすすむ】

【45】
どうやら化け物はこの敷地には入ってこれないらしい。安堵して暫く呼吸を整える。しかし化物が鳥居の辺りを引っ掻きはじめ、鳥居がぐらついていることに気づく。ここも長くはもたないか、そう思ったあなたは勇気を振り絞り、化け物が鳥居に夢中になっているところをすり抜けて橋へ向かった。【48にすすむ】

【46】
あなたはがむしゃらに走った。背後ではすぐ近くまで化物が迫ってきているようだった。先ほど転んでしまったので怪我もしており、足がだんだん鈍くなる。そうしてあなたは追いつかれてしまい、口を開けた化物の中…灼熱の炎に身を包まれてしまうのだった。
【END2にすすむ】

【47】
ふと右を見ると珈琲屋の前で頭が長くて大きい福の神の置物が目に入った。確か、福禄寿だっただろうか。福禄寿の置物はニコッと笑ったあと、僅かに腕を振ったように見えた。すると近くの建物の屋根の上に置かれた桶がひっくり返り、大量の水が化物の上に降り注いだ。化物は悲鳴をあげながら炎の燻らせ、徐々にその勢いを衰えさせていった。その場に倒れ込み、迫ってくる気配はない。すると目先で橋が光りはじめた。あなたは導かれるようにしてその橋を渡るのだった。
【END1にすすむ】

【48】

橋があったところの手前まできたところで橋がないことに気が付く。なんと、そこは崖のようになっていた。もう終わりだ。そう思いかけたが藁にもすがりたい一心で右耳に集中し、あの言葉を思い出す。そして小さく「　　」と唱えた。

例のおまじないを

知っている【49にすすむ】

知らなかった【50にすすむ】

【49】

小さく唱えると諦めない気持ちが湧いてくる。化物が接近してきたところで助走をつけ、崖の向こうに飛び出す。転落するかと思ったが、なんとか足元に橋現れた。もつれそうになる足を叱咤してそのまま全速力で走り、石碑の後ろに飛び込む。すると化物が、その僅か膝丈程度の石碑にぶつかる。衝撃波が辺りに拡がり、あなたは数メートル後ろに吹っ飛ばされる。それでも石碑はびくともせず、化物は耳をつんざくような悲鳴と共に弾け飛んだ。

【ＥＮＤ３にすすむ】

【50】

振り返ると猛スピードで徐々に距離を詰めてくる化物と目があった。もう、終わりだ……。そう思って反射的に身を屈めるとその頭上を化物が通り抜け、哀れな鳴き声をあげながら崖に落ちていく。暫くしてぼちゃん……と音がすると目の前に橋が現れた。助かったのか？いまだ鳴り止まない鼓動を落ち着けつつ慎重に橋を進む。

【ＥＮＤ１にすすむ】

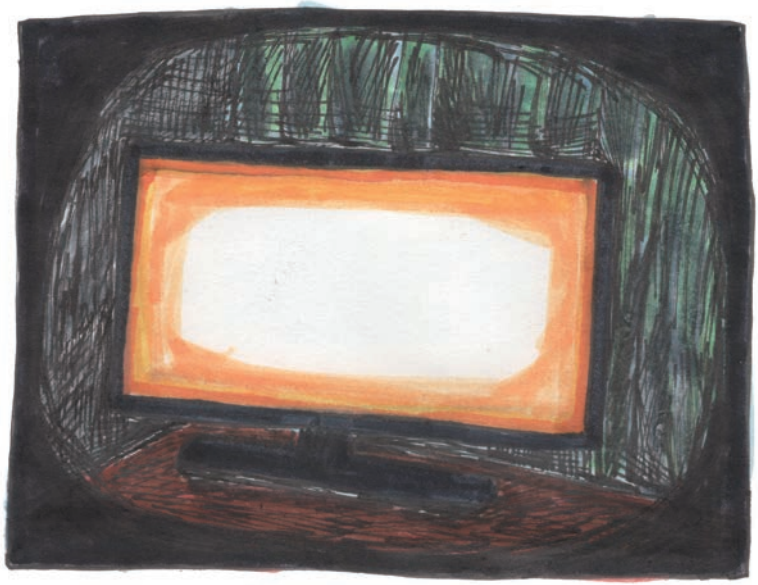
【END 1】

目を開けるとそこは元いた旅館の前だった。車の通りも多くあり、バスが時折ぷしゅうという音を立てながら乗客を乗せて走っている。時計を見るに、散歩に出掛けたあの日あの時間から5分も経っていないことに気づく。ひとまず助かったことに安堵したが散歩に出かける気にもなれず、今日は違う宿に泊まることにした。駅近くのビジネスホテルだ。

夜中、遠くでサイレンが鳴り響いていることに気づく。あの音は消防車だろうか。救急車の音も聞こえる。しかし精神的に酷く疲れていたあなたはそのまま眠りつくのだった。次の日の朝、テレビをつけるとあの商店街が夜中火事にあったことが報じられていた。原因は不明らしい。SNSで調べてみたが、どこかのお店でボヤ騒ぎがあっただの放火があっただの、まとまりのない信憑性に欠ける呟きばかりだ。自分の不思議な体験といい、この火災のことといい…何か関係があるのかもしれない。しかし探る気にもなれず、自分の身を案じてそそくさとその地を後にしたのだった。

【END 2】

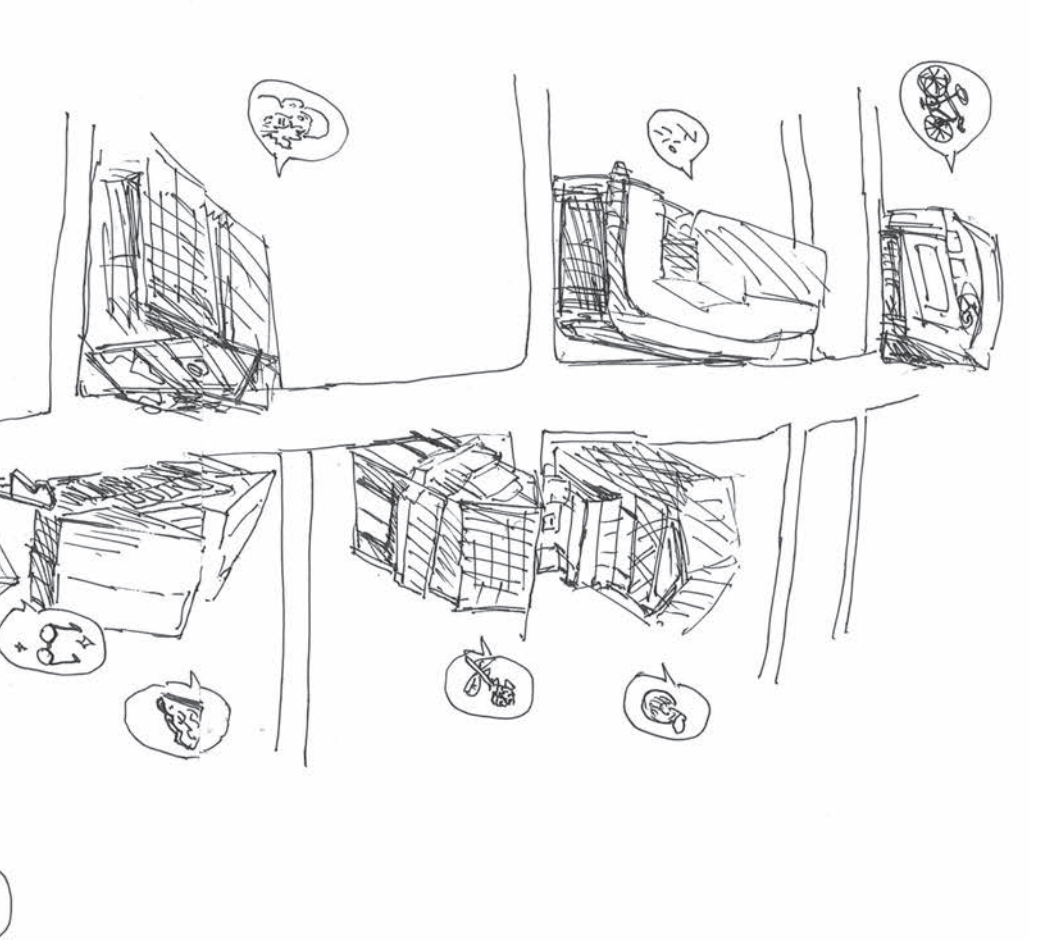
気が付くと商店街の道端に立っていた。自分は化け物に食われたはずでは？そう思ったが化け物はどこにもおらず、目の前の道路では車やバスが走っている。買い物をしにきた老夫婦やお店巡りに来た若い人たちの姿もちらほら見受けられる。呆然と立ち尽くす自分に目もくれず傍を人々が通り過ぎていくが、そこで自分が動いていない…いや、動けないことに気がついた。風も気温も、自らの鼓動も感じない。そう、あなた銅像になってしまったのだ。声をあげることもできず時間だけが過ぎていく。日がどっぷり暮れた頃、意識を覚醒させると辺りの建物が火に包まれていることに気が付く。目の前を忙しなく消防車が通り過ぎ、消火活動や救助活動に慌ただしく動く。あなたは熱さも感じることもない。そのまま街の再興を見届けることになるのだろうか。途方もない時間の流れに気が狂いそうになりながらも、あなたはその場に佇むしかないのだった。

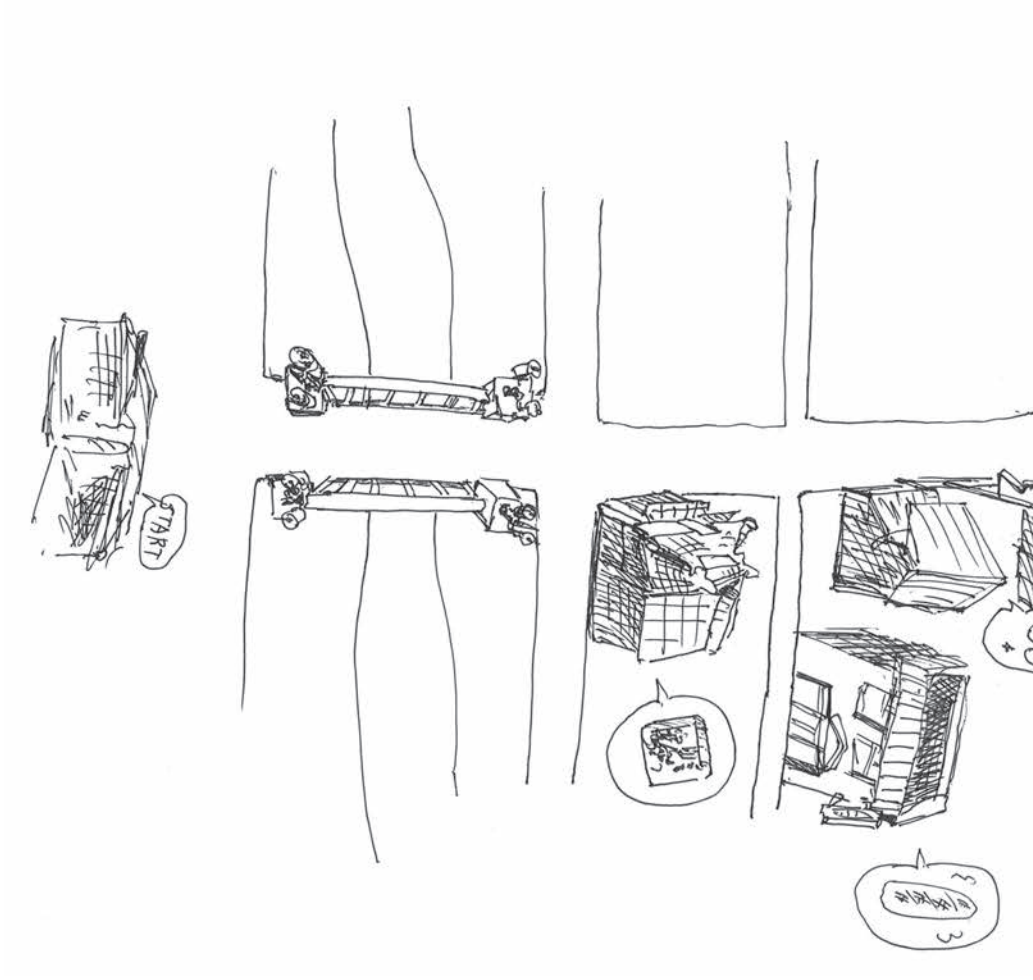


【END 3】

目を開けるとそこは元いた旅館の前だった。車の通りも多くあり、バスが時折ぷしゅうという音を立てながら乗客を乗せて走っている。時計を見るに、散歩に出かけたあの日あの時間から5分も経っていないことに気づいた。ふと近くの立て看板が目に入る。その下にあるのは石碑ではなく敷き詰められている粉々に砕け散った小石だ。ひとまず助かったことに安堵したが散歩に出かける気にもなれず、今日は違う宿に泊まることにした。駅近くのビジネスホテルだ、ぐっすりと寝たあなたは溜まっていた疲労もあってか昼近くに目が覚める。テレビをつけるとローカル番組が流れており、昨日自分が歩いていた商店街をレポーターがお店の紹介をしながら歩いていた。見覚えのあるお店や商品。また、他にもこんな面白いお店もあったのかとぼんやり眺める。宣伝コーナーでは今度あの商店街で市が開かれることが報じられていた。今日はあの不思議な世界でお世話になったお店にお礼をしに行こう。そう思い商店街へ向かうのだった。

【地図】




START

お忙しい中、突然お伺いした私たちを暖かくお迎えくださった通町商店街のみなさま、ご協力いただきありがとうございました。
この場を借りて感謝いたします。

トオリマチ奇譚

二〇二二年一月三〇日　発行

ストーリー　並川詩織
作　画　安村卓士
編　集　谷口茉優
デザイン　武田彩莉
調　査　MAP
調査協力　通町商店街の皆さん
秋田市文化創造館の皆さん